

《解説》

三谷恵子

ミリエンコ・イェルゴヴィッチ

Miljenko Jerговиć

一九六四年サラエヴォ生まれのクロアチア系ボスニア人作家。ボスニア戦争が激化する一九九三年までサラエヴォで暮らし、以後はクロアチアのザグレブに住んで芸文作品を発表するほか、ジャーナリストとしても積極的に活動している。ボスニア出身の現代作家では、アメリカ在住のアレクサンダル・ヘモンと並んで欧米圏でもっとも知名度が高い。最初の短編集『サラエヴォ・マールボロ』(Srejski Marboro (一九九四年)で作家としての評価を確立した。以後、主に故郷ボスニアの現代や歴史に題材した作品を発表している。

一人称の語りで進められる『ママ・レオネ』(Mama Leone (一九九九年) (英訳 Mama Leone [Stela Tomašević (trans.)] 二〇一二年 秋刊行予定)は、主人公が生まれてから成人になるまでの間のさまざまな場面を独立した短編で綴ったもので、一人の人間の成長とともに、ユーゴスラヴィアが戦争を経て消失に至る

までの姿が描かれている。『胡桃の館』(Dvor od oraha (二〇〇三年)は、ドゥブロヴニクのある一家を中心とした長編小説だが、話は二〇〇一年から始まって一八七八年で終わる形式をとり、オーストリアによるボスニア統治の時代から二〇世紀の三つの戦争をへて二一世紀に至ったボスニア・ヘルツェゴヴィナの物語ともなっている。『ルタ・タンネンbaum』(Ruta Tannenbaum (二〇〇六年) (英訳 Ruta Tannenbaum [Stephen Dakey (trans.)] 二〇一一年)は、第二次大戦前のザグレブを舞台にユダヤ系家族と主人公ルタ・タンネンbaumの短い生涯を語ったもので、俗語的な表現を多様しながら、当時のザグレブの雰囲気や彷彿とさせる情景描写を作り出している。

戦争を背景に書かれたこれらの作品を通して読むと、この戦争を実体験した作家の、祖国への憂愁と受着がにじみ出てくるような短編集である。

自らの半生を「失われた故郷への道」と語る作家は、ジャーナリズムを通してボスニアやクロアチアの政治や戦後処理のあり方などを鋭く批判しながら、文学者としては「幸いにしてまた不幸にして、文学は現代社会に何の影響力も持たない」という「健全な」考之のもと、独自の語りのスタイルの模索を続けている。

訳出した「盗み」を含む『サラエヴォ・マールボロ』は、新聞や雑誌などに個別に掲載された二十九の短編をまとめたもので、いずれの作品も、ごくふつうの人間の生活の断片を、時に皮肉と哀愁をこめて、時にやや感傷的に、あるいはユーモラスに、あるいはさりげなく残酷にスケッチしたものである。長年の隣人が突然敵に変わり、正常と異常が限りなく混ざりあったボスニア